

## 2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学校名	桑名市立久米小学校	氏名	清水 歩美
-----	-----------	----	-------

### <印象に残る写真2点>

#### ●写真1 [3767]

##### 地球の裏側にできた家族

初めてのホームステイ。言葉はあまり通じなかったけど身振りや表情で伝わるものがたくさんあった。私たちの言葉に一生懸命耳を傾け、温かく受け入れてくれたパラグアイの家族のみんな。別れの時には自然と涙が出た。



#### ●写真2 [2769]

##### 子どものパワーは世界共通！

時差ぼけで疲れていても、子ども達と触れ合うことで自然と湧いてくる力があつた。どこへ行っても子どもにはすごい力があることを実感した。そして「いつか海外で授業をしてみたい」という夢が叶った瞬間でもあつた。



### 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

#### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、「自分自身が異文化を積極的に経験したい、そしてその経験を自身の言葉で子どもたちに伝えることで、世界に興味を持ってほしい」「世界を知ること、日本のことももっと好きになってほしい」と思い、本研修に参加した。私自身が研修の参加が決まるまでパラグアイのことを全く知らなかったのと一緒に、何かのきっかけがなければ子どもたちもその国について詳しく知ることはない。パラグアイという1つの国について学ぶことが始まりとなって、「世界にはいろんな国があるんだ」「もっと知ってみたい」と感じるようになってくれたらと思う。これからの授業実践は、その懸け橋になると思う。現地研修では、その目的をいつも感じながら過ごすことができた。現地では、教育格差や貧困問題など実際に目で見たからこそ感じるものがあった。また、日系社会に対してイメージが変わったところがあったり、ホームステイを通して日本にはない文化を感じたりして、なんとなく思い描いていた帰国後の授業の展開が少し変化したところもあった。小学校1年生の幼い子ども達ではあるが、五感を使った体験を入れながら異文化に積極的に関わろうとする姿勢を育てていきたい。

## 2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

### （1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

パラグアイの文化を経験する時は「相手を知ろうとする気持ち」「受け入れる気持ち」を大切にしようと思いい、日本にない習慣やおもてなしがあっても、驚かずにチャレンジしてみようと決めて研修に臨んだ。

パラグアイ人は「テレレ」という、同じコップでお茶を回し飲みする文化をととても大切にしている。ただお茶を飲んでいるのではなく、相手の人を受け入れ、その人たちと一緒に過ごす時間を大切にしているのだ。私はこのテレレを通して、逆にパラグアイ人から「訪問国に肯定的に出会う」ことを学んだ。ホームステイ中、庭でゆっくり話をしていたときにテレレが回ってきた。正直な感想は、「やったあ」だった。テレレを経験する嬉しさよりも、テレレを飲みながら家族の一員としてこの時間を一緒にすごせることに喜びを感じたのだ。この文化が、パラグアイ人の温かさやつながりを大切に思う気持ちに繋がっているのだと思う。子ども達にもこの経験と想いを伝えてみたいと思う。

### （2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

事前に予想していたよりも遥かに日本とのつながりを感じた10日間であった。日本では、「パラグアイってどこ？」とおもわず聞き返してしまうことが多いが、パラグアイの人々は日本のことをよく知っていた。カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校では、意外にもたくさんの日本とのつながりを感じた。日本からの支援が多く、学生達の使う機械や机やイスには日本のマークが貼ってあった。多くの学生たちは、日本の印象を「テクノロジー」と答え、日本に対して憧れを抱いている学生もいた。50年近く昔に、日本から支給された部品を大切に使っているとの話も伺うことができた。この訓練校の学生たちが、自分の夢に向かって専門技術を学んでいる周りには、たくさんの「日本」があることが驚きでもあり、嬉しく感じた。こうしたパラグアイと日本とのつながりを知っている日本人は少ない。パラグアイとのつながりを、日本で子ども達や周りの人に積極的に伝えていきたいと感じた。

### （3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

私は小規模ゴマ栽培農家支援優良種子生産強化プロジェクトと白沢商工株式会社の訪問から、「共通の課題について共に考え・共に越える」ことを学んだ。ゴマの生産という現在の形に至るまでに小規模農家の貧困を共に考え、小規模農家にできることを模索したと聞き、感銘を受けた。大規模農家に真似をされると負けてしまうことを想定し、機械ではなく手作業が合っているゴマに着目したと話す白沢社長の言葉を聞いて、ふと自分の教えている子どもたちの顔が思い浮かんだ。目標を教師で定めてしまい、子ども達をそれに近づけようとしてしまうところが自分にはあった。だが、目の前にいる子の良さを引き出し、彼らの目線に立ててできることを考えなければいけない。すぐに結果が出るものではないことを理解し、将来を見据えた的確な支援を行うことが教育にとって大切なのだということを改めて気づかせてもらった。パラグアイの人々を救おうと懸命に考え、それを行動に移した白沢社長たちのように、私も目の前の子ども達と共に考え、共に越える教師を目指したい。

## 3. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の現地訪問で、今まで知らなかったJICAの国際協力事業の幅広い取り組みを知ることができた。特に教育機関にはさまざまな分野の人が派遣されており、物だけでなく「技術」や「知識」を多く提供していることが分かった。こういった事業によって、パラグアイの良さを生かしながらも、長期的にパラグアイを支援しているのだと感心した。

今後あるといいなと思う視点として、「医療」と「特別支援教育」を挙げる。イグアス日本人会で、今必要

な物を尋ねると「医療が充実してほしい」と話してみえた。十分な医療を受けるためにはブラジルに行かなければならないこともあるそうだ。青年海外協力隊の大原育子さんのお話の中にも医者や看護師の人数が少ないとの言葉があった。私も事業に対してはまだ知識不足ではあるが、医療関係の充実に向けてさらに積極的な事業が行われるといいなと思う。あと、パラグアイの特別支援教育の課題が今回の研修でも見られた。大学に特別支援教育の教員養成システムがないということだったので、それができるとして今後の特別支援教育に対する意識も変化するのではと思った。

#### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

##### ② 青年海外協力隊（障害児・者支援）活動／サン・ミゲル特殊教育センター [清水／市江]

パラグアイで訪問した最初の教育機関が、サン・ミゲル特殊教育センターであった。私たちが到着すると多くの先生方や子ども達が歓迎してくれた。昨年から派遣されている青年海外協力隊の渡辺真理子さんが明るく子ども達に呼びかけ、子ども達に人気の「picky picky」という曲でダンスをして交流を行った。はじめは照れていた子ども達ともすぐに打ち解け、一緒に青空の下で元気いっぱい体を動かすことで私達も元気をもらった瞬間であった。子ども達は素直で明るく好奇心旺盛で、どの国でも子どもたちにはすごい力があることを実感した。パラグアイではまだ特別支援教育が十分でないことから、開校から今日に至るまでにたくさんの努力があったと校長先生が話してくださった。特別支援教育に対する教員の専門知識を高めることや、学びの環境づくりなど課題点も学ぶことができた。今後のパラグアイの特別支援教育がどのように変化していくのかをますます知りたくなった。(清水 歩美)

##### ⑥ イグアス日本人会 [清水／田原]

移動中のバスの車窓から「夢いっぱい元気にはばたこう イグアス会」という看板を目にした。日本語で書かれたその看板にはどんな想いがあるのだろうと考えながら、パラグアイ生活3日目となるこの日、イグアス日本人会を訪問した。日本人がパラグアイへ移住して、今年で80周年。イグアス市への移住は今年で55年になり、現在市内には750人の日本人・日系人が暮らしている。到着すると、比嘉会長や福井顧問が出迎えてくれ、日本人会としての活動やパラグアイに暮らす日系人としての想いを話してくださった。東日本大震災時には被災地へ「豆腐百万丁支援」を行い、目標に向かって日本人会で団結して活動されたことも伺った。さまざまな話を聞く中で特に印象に残っているのは、「今のような普通の服を着ていられるのは日系を受け入れてくれるパラグアイ人のおかげ」という言葉だ。移民から55年の間にさまざまな苦労があったことも教えて頂き、今日本人・日系人が安心して生活できることの裏には移住当時の先人たちの努力があったことを実感した。その日の朝に見た看板の文字に隠された想いが分かった気がした。(清水 歩美)

##### ⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

この研修で私が楽しみにしていた訪問地の一つがイグアス市でのホームステイであった。パラグアイの家庭での生活をリアルに体験できるとも貴重な時間。そんな貴重な時間だからこそ積極的に異文化を楽しもうと思った。家族のみんなに会うと、お母さんが「娘が2人もできてうれしい。今日から私たちは家族よ」と言って私たちのことを抱きしめてくれたことがすごくうれしかった。言葉はあまり通じなかったが、私たちが伝えようとすることに一生懸命耳を傾け、理解しようとしてくれる家族のみんなはとても温かかった。それに、表情や身振りを使ってお互いに相手のことを知ろうとしたことで、実際に分かり合えたこともいっぱいあった。食べきれないほどのおいしい食事を作ってくれたり、私達をいろんな人に紹介して町中を案内してくれたり、日本から持って行った折り紙を最後まで一生懸命折ってくれたり、手作りの抹茶プリンを「おいしい!」と言って完食してくれたり、最後まで温かい家族だった。地球の裏側にできた私のもう1つの家族。これからも大

切にしていきたい。(清水 歩美)

#### ⑪ 青年海外協力隊(看護師)活動/パラシオ・デ・フスティシア保健ポスト、ドン・ボスコ・サレシアノ高校 [清水/安藤]

パラシオ・デ・フスティシア保健ポストでは、看護師として派遣された青年海外協力隊の大原育子さんにお話を伺った。医療に携わる人の数が少なく、設備も整っていないビジャ・リカ市で、どのような活動ができるか懸命に模索されている大原さんの様子を感じた。その後のドン・ボスコ・サレシアノ高校では、大原さんの講義を私たちも後ろで見学させてもらった。中絶が認められていないパラグアイではシングルマザーも多く、それが貧困問題の原因の一つになっている。宗教上のことも配慮しながら、伝えられる範囲で妊娠について学生たちに話し、男女ともに生命の大切さについて考えるきっかけを与えていた。少し恥ずかしがりながらも、真剣に考える学生たちの姿がとても印象的である。講義のあとの交流では、校庭に集まり全員で「だるまさんがころんだ」をした。高校生と全力でする「だるまさんがころんだ」はとてもおもしろく、無邪気な学生たちと素敵な交流ができた。(清水 歩美)

#### ⑫ 白沢商工株式会社 [安藤/清水]

日本人が立ち上げたゴマの会社ということで、白沢商工株式会社への訪問はとても興味があった。広大な土地に「SHIROSAWA」と大きく書かれた建物がすぐに目に飛び込んできた。建物に入ると、日本語で表記された見たことのあるゴマやお菓子のパッケージが展示されていた。パラグアイの貧困対策として、換金農業であること、綿花に変わる作物であること、大規模農家と競争にならない農業であることを考え、ゴマの生産を始められたと教えて頂いた。白沢社長の言葉からは、パラグアイを貧困から救いたいという気持ちが何度も感じられた。「人のためになることを続けたい」「使命感を持って」と話す白沢社長の真剣な表情がとても印象に残っている。その後、ゴマを選別する工場を見学し、製品化されるまでの過程をみせて頂いた。土や砂の混ざったゴマが、さまざまな技術を使って段階を追ってきれいになっていった。地球の裏側にいる日本の人々に届けるために、多くの努力と配慮があることを感じた。(清水 歩美)

#### ⑬ JICA パラグアイ事務所関係者&JICA 東北受講者との懇親会@アルパ・ロガ [清水/田原]

パラグアイの地で、多くのJICA関係者の方々とお会いできるということでこの懇親会をとても楽しみにしていた。会場となるレストランで、チパやソパ・パラグアージャ(固形スープ)、迫力満点のお肉、デザートなどのおいしいパラグアイ料理を食べながら、近くの人たちと色々な話ができ、アルパ演奏(パラグアイのハーブ)やボトルダンスなどもあって、会場は大盛り上がり。大きめの声じゃないと、隣の人と会話できない〜というくらいで、とてもにぎやかで楽しいひと時だった。青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、JICA東北の教師海外研修受講者の方々と、パラグアイの生活のことや今の日本の出来事のことなどを話す時間がたくさんあった。「パラグアイの食生活や時間の感覚に慣れるまでは時間がかかったけど、それもパラグアイの魅力。残りの時間を大事にしたい。」と話す方も何人かいて、パラグアイの魅力を改めて知ることができてなんだか嬉しく感じた。(清水 歩美)

### 5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

出発の日までに準備するものはたくさんあるので、なるべく早めに準備することをお勧めする。でも、全員が持っていかなくてもよいものも案外多いので、チームで協力して分散させるといいと思う。お土産は、渡す相手が日本人か現地の人か定かではないこともあるのでチョコレートなどの無難なものを選んでよかったと思う。協力隊の方には、日本らしいものがとても喜ばれた。とくに、混ぜこみわかめに喜んでくれた人が何人かいた気がする。

学びの視点では、1日のふりかえりの時間をみんなで共有することが自分の学びを深められると思った。予定がぎっしりで疲れた日も多かったが、ふりかえりをする中でメンバーの意見を聴き、自分では気づくことができなかった事柄に気づかせてもらった。でも、身体がしんどい時は絶対に身体優先にするべき。私はかなり時差ボケに苦しんだので、翌日の活動に支障がでないようになるべく早めに寝るようにした。あと、移動時間が長いこともあるので、酔いやすい人は酔い止めを多めに持っていくとよい。私はほぼ毎日飲んだ。

## 6. その他全般を通じての感想・意見など

研修に参加させていただいたことで、パラグアイのことを知り、多様な文化や考えがあることを学んだ。本当に貴重な経験をしているのだと感謝の気持ちを持ちながら、現地での研修期間を過ごした。事前研修で、自分たちのミッションや学びの柱が明確になっていたことで、目的を見失わずに過ごせたと思う。分からなくなった時はマナビノオトをふりかえり、学びの柱を確認したり、スケジュールを確認したり、その時の考えをメモしたりできたので、このノートが存在はありがたかった。そして何より、この研修を共にした仲間たちと考えを共有できたことはより深い学びに繋がった。日々のふりかえりの時間はもちろん、移動のバスの中や食事中の会話から気づく事はたくさんあった。2週間共に過ごすことで9人+2人（通訳のエリカさん、運転手のグスタボさん）の新しい魅力もたくさん発見できた。私たちが研修をするにあたって、日本や現地でたくさんの人が関わり、支援してくださったことを心から感謝したい。

以上

